

吉川英治

歴史時代

文庫

52



新平家物語(六)

吉川英治^{歴史時代}文庫 52

新・平家物語(六)



一九八九年六月十一日第一刷発行
一九九三年一月十二日第八刷発行

著者——吉川英治

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二二

郵便番号一一二—〇一

電話 編集部 〇三—五三九五—三五〇五

販売部 〇三—五三九五—三六二六

製作部 〇二—五三九五—三六一五

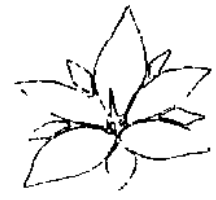
印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えます。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196552-2

©吉川文子一九八九(文2)



吉川英治_{歴史時代}文庫 52

新・平家物語
(六)

講談社

目次

御産の巻(つづき)

7

りんねの巻

207

略系図

453

註解

457

これからのつきあい

栗本薫

459

新・平家物語の旅(六)

尾崎秀樹

461

新・平家物語
(六)

御産おさんの巻まき（つづき）

鬼界ヶ島

「なんと、あれほど不敵な平家への謀叛むほんなるに、死罪は、西光法師ただ一人であつたるよ」

「多くは配流はいりゅう。それも、あらましは近国。遠くは、わずかに三、四名」

「大挙、福原を發せられた時のお怒りほどもなく」

平家一族の間でも、事件後、無血に事の処理されたのを、よろこぶもあり、また、こういって、相国の手ぬるさと寛大を、齒がゆがる一部もあつた。

それかあらぬか。——罪には問われなかったが、明らかに、陰謀組かげぼうぐみの加担人かとうんどと見られる公卿や坊官などの邸宅に、その後も、しきりに、小事件があつた。

放火されたり、または主が出先で袋だたきにあうなど、余燼よじんのいぶりは、六波羅武者の下級の感情へ移ってゆき、これは取り締る者がないし、急には、下火したひになりそうもない。

「西光法師の嫡子、さきの加賀守師高が、尾張井戸田の、配所で殺されたそうな」

「次男、近藤判官師経も、獄中で人知れず刺されたというぞ」

そんな風聞が伝わってから、ふた月ほど後のことである。

備前の国、吉備郡庭瀬ノ郷に流された新大納言成親が、その配所、有木の別所で、ついに非業な死をとげたといううわさが、都の秋の訪れと一しよに聞こえた。

中には、最期の有様を、眼に見たように、語る者もあった。

守護の武士、難波次郎経遠が、初めは、酒に毒を入れてすすめたが、大納言の君が、お口にしないので、二丈もある断崖の下に、刃を植え並べ、上から大納言の君を、突き落したというのである。

語る者は、

「大納言殿の北の方から、お文をうけて、備前の配所へ忍び下った源左衛門尉信俊という侍が、それを見届けて、泣く泣く、おん遺髪を持って帰った」

と、まことしやかに、付け加えることも忘れなかった。

そして、平家に悪意を抱く藤氏の人びとの間には、「尾張のことも、備前のことも、みな入道相国のさしずによることよ」

と、ささやかれた。

しかし、心ある者は、そんな見えすいた中傷を、信じもしなかった。

清盛が、新大納言成親に、死を与えようとするなら、何も、そんな作為をするまでの

ことはない。ましてや、師高だの師経ごときを。

また、成親を、殺させるほどならば、どうして、子息の少将成経をも、殺さないのか。諸説、さまざまである。

そして、ほんとのことは、たれにも分からなかった。ただ新大納言が、その後、幾月も経たないうちに、配所先で終わったことだけは、まちがいないといってよい。

諸国へ分けて追いついた流人たちの護送は、ほとんど、逮捕の直後に行われ、事件の終熄とともに、それも台風一過の観であった。ところが、ここにその月の二十日ごろまで、なお摂津の浦に、船出を見合わせていた一と組が残っていた。

新大納言の嫡子、丹波少将成経。

平判官康頼。

法勝寺の執行、俊寛僧都。

これは、はるか薩摩瀧鬼界ヶ島へ囚人を送るための、流人船であった。

半月の余も、船出が遅れたわけは、少将成経の舅、門脇殿の教盛が、なお福原の別荘にまで、兄の清盛を追って来て、少将の赦免を、哀願してやまなかったためともいわれ、また一説には、法勝寺の俊寛ひとりが、じつはまだ捕まらないで、詮議に手間どったためだともいわれていた。

俊寛を、日ごろに知っている者は、

「ありそうなことよ」

と、うなずき、

「あの俊寛が、なんでそうやすやすと捕われようぞ」

と、みないった。

しかし、どっちにしても、かれも逮捕されたのは、確實である。

その月の二十日すぎには、牢のような箱囲いに、灰色の帆を張った流人船の影が、摂津の浦から沖へ薄れて行った。

護送使の武士たちは、べつな二艘そうに乗り分かれ、潮除しおよけの船幕をふくらませてゆく。

部将は、瀬尾太郎兼康。

兼康の郷土が、備中なので、便宜もよしと、この命をうけたものらしい。

幾夜かを波の上に寝、中国のわびしげな漁港についた。

「ここにて、二日ほどは、糧かて、水、薪たきぎなどを積み入れます。この地を離れて後は、もう本土を見られることもありますまい」

兼康のことばに、囲いの中の流人たちは、小さい切窓から、こもごも、首をさし伸ばして、あたりの岩山や漁師の小屋にまで、名残を惜しんだ。

少将は、兼康へ訊たずねた。

「ここは、どこぞ。……備前か備中か」

「いや、その辺の磯^{いそ}は、もう夜のうちに過ぎてしまいました。ここは周防^{すおう}の室積^{むろづみ}とよぶ所です」

「父君には、さきに備前備中の境、庭瀬ノ郷とやらの山寺に送られ給いしとか。……その庭瀬の山寺へは、どれほどな日数^{ひかず}がかかろうの」

「さあ、兼康にも、分かりませぬなあ。足で測^{はか}ってみぬことには」

「方角は」

「かなたかと、思います」

「あの幾重もの、山のかなたかや」

空を恋う鳥のように、果てなく、首を出したまま、少将は涙をながしていた。その涙の顔さえ、そうしては、ぬぐえもしないほど、小さい窓の口だった。

「しょせん、お目にはかかれませぬ。……ふたたび、父よ子よと、この世で呼びかわすことも」

悔いられることばかりが、舷^{ふなべり}を打つ潮のように、心のうちで鳴りやまない。

なぜあんな野望とともに抱いたのであろう。子として父を止めなかったか。そして、ああそして、なぜもっと、家にいたころの毎日を、もっといいねいに、楽しんでは来なかったか。

「……妻は。……母は」

思いつめると、かれは、生きていることが恐^{こゝろ}い。たまらなく死を思う。そして死に難

い死をえがくほど、なお生ける身が苛まれてくる。

「おい、少将どの。もがいて、どう召さるの。——鬼界ヶ島までは、わしのように、寝ているに限るぞ。昏々と、こう、身を波まかせに」

薄暗い所で、俊寛の声がした。

見ると、俊寛は、腕をくみ、荒むしろに、胡坐して、囲いの板へ、背中をもたせかけている。

平判官康頼は見れば、この漁港へつくとすぐ、兼康にゆるしを乞い、剃髪して、法名も自分で、性照と選び、さっきから、誦經三昧にはいつていた。

「ふふふ。……この期に」

俊寛は、康頼の方へも、あざわらうような眼ざしをくれてつぶやいた。

「——幼少から弥陀菩薩と一つ屋根の下に住み、僧都とまでなった俊寛ですら、迷えば迷うし、この姿にもなる。……地獄か極楽かの岐れ路なら、間に合うやもしれぬが、鬼界ヶ島へさしてゆく波路の上で、にわか出家や、思いつきの勤行が、はてなんになる。笑止な真似よ」

船は、ふたたび、纜を解いた。

波の音、帆のはためき。——それしか耳に響かない幾夜がつづく。

にわか出家の康頼も、悶々と寝もやらずに泣いてばかりいる少将も、囲いの小窓から差し入れられる稗と塩味だけの囚人椀には、箸をとる力もない。

「飢え死にをなされようとおつもりか。食わでは生きられぬぞ。生きぬ気なれば、泣くもむだ、経読むもむだ。なんと、悟りのお悪い……」

そんなことをいいながら、うまそうではなくても、とにかく朝夕の糧かてを、すばすばと食べてしまうのも、俊寛だけであつた。

薩摩の国も、遠く南へ離れて来たか、波のうねりも大きくなり、颯々さつさつと、囲いを打つ潮風の荒すさびも烈しくなるにつれて、俊寛の気もちや、物のいい方は、ひどく荒々しいものになって来た。

「……無念だ。行綱めの密訴にあい、一夜に事現われて、かかる憂き目に落ちたのも、残念だが、より口惜しいのは、そこらに、物も食い得ず、めそめそしている不覚者などと一しよに、生涯の大事を誓うたことだ。……ああ、ばかばかしさよ。腹が立つ。島へ着いたら、大声で自分を嘲わらうか、泣きベソの少将と、にわか出家殿の頭でも、一つ二つ、撲なぐらせてでももらわねば、腹が癒えぬわ。どうにも虫がおさまらぬぞよ」

ひとりごとではない。

荒むしろに、寝返りを打ちながら、二人の耳へ、聞こえよがしにいうのであつた。

俊寛と・やどかり

「これから住む鬼界ヶ島とは、そも、どんな所ぞ」

と、流人^{るにん}たちはおのおの妄想^{もうそう}にとらわれている容子^{ようこ}だった。

まだ人煙のある陸地が見えている間は「いっそ、死んだが増し」と悶^{もだ}えていた少将や康頼も、やがて水と空ばかりな潮路^{うしおじ}の日が果てなく送られて行くうちに「生きたや。たとえどんな島の上にも——」と、生への執着に、指の爪も伸び尖^{とが}るような思いに変わっていた。

ただ、俊寛^{しゅんかん}だけは、そうとも見えない。かれにも妄想はあるうが、動揺は見せなかった。一見、観念^{くわんねん}しきっている姿である。太々^{ふてふて}しいまでに、運命を直視し、他の二人のいたずらなものがきを、終始、冷笑の眼で見ている。

すると、ある日、護送の武士たちが、舷^{ふなべり}でいい噪^{さわ}ぐ声が聞こえた。

「やあ、いよいよ島影が見えて来たぞ」

「え。鬼界ヶ島が」

「あれよ。うっすらと、硫黄^{いおうやま}山が煙をひいて」

「おう、見える、見える」

船底の三名は、さてはと、何やら最期^{さいご}の宣告にも似た思いに胸をつかれた。けれど、船は途中で大型な帆船に代っている。切窓もない船底の深さに、外の声は聞こえて来ても、のぞいてみるすべもなかった。

黄昏れごろ。——およそ周囲四、五里ほどかと思われる一孤島へ、流人船の帆影は、忍び寄るように近づいていた。

島には高い木も見えない。

船が着いても、磯^{いそべ}辺に寄って来る人間もなかった。

その小さな湾のほかは、全島、いずこを見渡しても、奇岩乱層の荒磯^{ありそ}か絶壁で、小舟の寄れそうな砂浜もない。

船底の三人は、船の揺れがやんだと知ると、そこがどんな島であろうと、

(一刻も早く、土が踏みたい。この足で、土を踏んで見たや)

という思いに駆^かられた。

しかし、その夜は、降ろされなかった。

楽しさとも不安ともつかない最後の一夜を、まじまじと明かすうちに、

「さきの丹波少将成経」

と、呼ぶ声が上に聞こえ、つづいて、

「平判官康頼。法勝寺の僧都^{そうず}、俊寛^{しゅんかん}」

と順に、舷^{ふなべり}へひき出された。

護送使の瀬尾太郎兼康が、一応、罪文を読みあげ、それがすむと三名は、ただちに船から島へ降ろされた。

——いや、捨てられた。

船は、三名を置き捨てると、すぐ帆を張って、島を離れてしまった。

「……………」